

歴史と文学の宿

旧街道・歴史の舞台・文人ゆかりの宿220

越後高田の長養館
山崎朋子



女性史研究家

越後高田へ行くことがあつたら、街道の西側に軒をならべているという昔風の宿屋に泊つてみたいものだと思っていた。

二十歳を過ぎたばかりだったわたしの夫が、はじめてのひとり旅で高田を訪ねたときのことだけれど、立派な宿は宿泊料が高いにちがいないと、選りに選つてもっとも古くて質素な旅館の敷居をまたいだ。通されたのは次の間を入れると二十畳もありそうな座敷で、そこへひとりで寝かされて、さて、夜中ふつと目覚めたら一間半もある床の間に大きな大きな虎の絵が掛かっている。そして、その虎がこちらを見んでいるだけれど、「あ、江戸時代の旅人たちも、こうやってひとり夜中にめざめて、この、猫をでつかくしたみたいな虎の絵を見たのかな」と思つたら、何ともやるせなくなつてしまつたといつ」。

この話を聞いて、わたしは北国街道が南北に分れるところに在る町、江戸へ上方へまた佐渡へと旅人たちが急いで行った町である高田に、いかにも似つかわしい感じてしま

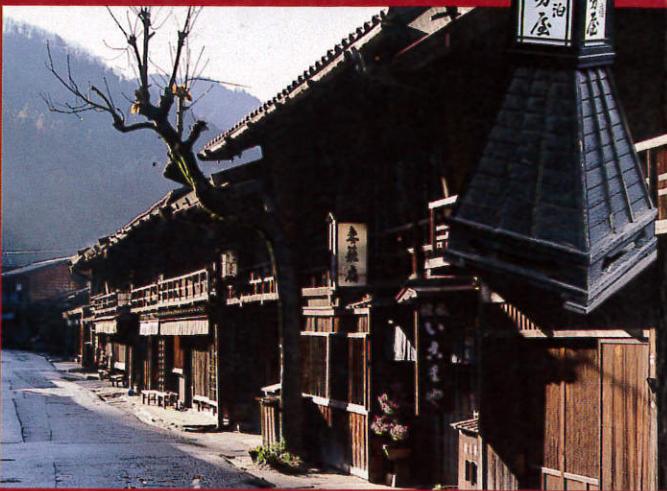
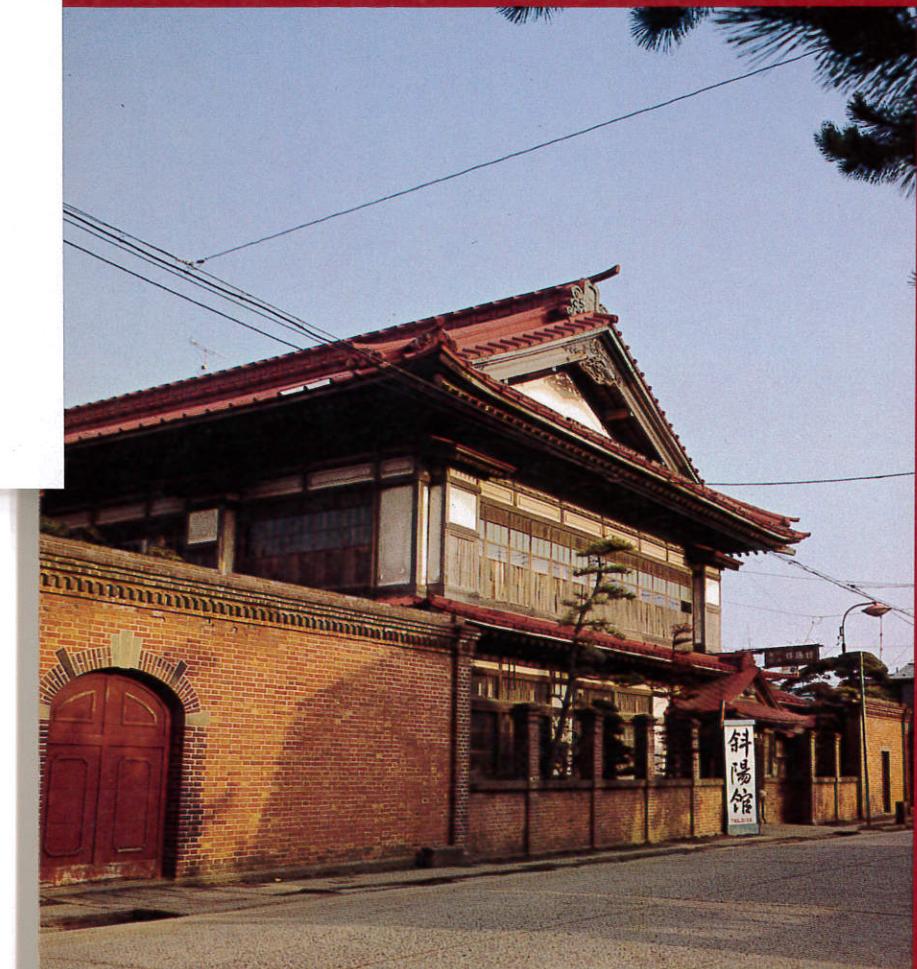
つた。そうして、何時かしら越後高田へ行く折があつたら、その昔の商人宿、大きな大きな虎の絵の掛かっている旅館へ泊るんだ——と思うようになつてしまつたのである。

しかし、わたしが初めて泊つた高田の宿は、そこではなくて、今ではもつとも古くもつとも高い格式を誇る長養館という宿だった。それも、もう、十五年も昔のことになると思う。

夏休みの家族旅行で佐渡へ渡つたのだが、着くと同時に娘が高熱を出してしまい、泊つた民宿から医者へ通つただけで、金山も海府の海も見なかつた。幸い大したこともなくて済んだので船で直江津へ出て、知人のいる高田で求めた宿が長養館だった。そこで、駅のすぐの裏手、高田の景観の特徴をなすといわれる杉の木立にかこまれた和風の宿で、庭の苔の美しさが今も忘れられない。夫の友人で児童文学作家の杉みき子さんとはじめて顔を合わせたのも、この時、この長養館の部屋でだつた。そして、その折の杉さんの話によると、何とこの長養館は彼女の親戚にあたり、彼女は小学生のときこの親戚にあつた小川未明の童話集を読み、未明が高田の出身でしかも彼女の通つている大手町小学校の卒業生であると知り、それで感激して童話作家を志したのであるということだ——。

わたしは、ここ五、六年というもの高田の土を踏んでいない。農山村の過疎化した分だけ都市およびその近郊が急速に変化する現代だから、越後の三天平野のうちのひとつの中北部にある高田にも、おそらくは変貌の風が吹いており、高田と直江津が合併して上越市などという名になつたのもその現れなのだろうか。

非力なわたしには何をすることもできないのだけれど、心の裡で祈らないではないらしいのである。——上杉謙信の居城があつたという春日山よ、その下につづいていた杉並木の美しい北国街道よ、変わらないでいておくれ、と。そして長養館の庭のあの美しい苔の色よ、何時までもそのままであっておくれ、と。



交通公社のMOOK 日本の宿シリーズ3

